
かつての私の恋の話をしよう

夏向朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かつての私の恋の話をしよう

【Nコード】

N1883Q

【作者名】

夏向朔

【あらすじ】

かつての私——つまり小4の私の身に起きた恋の話。

記憶があいまいなところもあるので、フィクションもちよこちよこいれてます。

始まり（前書き）

恐らく、変な文法になってるところがあると思いますが、大目に見てください。

誤字、脱字等があれば、教えてください。

始まり

当時、私には仲のいい男子がいた。

正確に言えば、悪戯をされてそれを追いかけていた仲、と言った方が正しい。

だけど、その反面よく話したし、そいつを追いかけるときも楽しかった。

まあ、とにかく私とあいつは仲が良かったのだ。

そんな彼（以下T）に、ある日の給食の時間、私はこそりと耳打ちされた。

「昼休みに中庭に来て」

と。

その時は何も考えずに、うん。と簡単に私は返事をした。
今思えば、簡単に返事をしすぎである。

（中庭かぁ・・・何だろう。告白？ いや、それはないか）

もちろん、そんなことも考えたりしたのだが、どうせ昼休みになれば分かることだと割り切っていた。

そして、その予想は的中することになる。

なんてベタな告白

「好きです」

言われたのは確かこんな言葉だった気がする。

記憶が薄くて、確かことは言えないけれど、あの時私は告白された。

———だけど———今思えば、その私を5発ほど殴ってやりたい———正直言って、私はTを恋愛対象として見ていなかった。

いや、正確にいえば『好き』だったのかもしれない。今はあの時の私の気持ちを図ることはできないが、当時の私にとってTは【友達】だったのだ。

そして、私はTの告白に対しておどましい答えをしてしまった。

「わたし、N君が好きなの」

そう。

当時の私はNという同級生に気持ちを寄せていたらしい。
今の私ならきつとこう言うだろう。

『私も』

と。

今さら比較しても遅いけれど、私のNへの気持ちは一方通行。
しかし当時は、Tの私への思いと、私からのTへの思いは、ごく僅
かながらも繋がっていたのだ。

こうして、Tは玉碎し、私とTとの恋模様は終わった。

かのように思えた。

えっ？

「じゃあ、今週の木曜日の放課後に、しりょうしつに来て」

Tは私にそう言った。

えっ？である。

当時の私がどう思ったかは知らないが、今の私にしてみればえっ？
としか言いようがない。

考えてみるといい。

Tはフラれた女に対して、尚もしがみつこうというのだ。
見上げた根性である。

言葉の意図を汲めない私に、彼はこう続けた。

「おれがNに、はじめを好きかどうか聞いてくる」

そう言うなり、Tは運動場へと走り去ってしまった。
向こうもいろいろ恥ずかしかったハズだ。無理もない。

とまあ気付けば私は中庭に、一人ポツンと立っていた。
まあ、Tからの突然の告白にも驚いたのもあるが、それよりTが私
に恋心を抱いていた。ということが一番驚きだった。

その後は特にTから何か言われるでもなく、いつものようにちよっかいを出されて追いかけるだけの午後に終わった。

・・・私はTが好きなのだろうか？

私のTへの思いは友情なのか、恋心なのか・・・。

うーん、わからない。

こんな中途半端な感情が一番厄介なのを、この時私は初めて知った。

少女マンガの主人公が、男友達だった人物に告白された時の気持ちがよく分かった（気がする）

まあいい。全ては木曜日にわかるハズだろう。

私はそんな思いで、その日が来るのをただ、待ち続けた。

そして、Tからの接触もほとんどなく、日は経ち木曜日になった。

Nの答え

「先生さよーなら、みなさんさよーなら」

帰りの会が終わった教室に、同級生達の声が響き渡る。

ランドセルを背負った私は、玄関へと向かう友達に別れを告げて、Tとの約束を守るため資料室へ向かった。

ここで今回、資料室と呼ばれる部屋について説明しよう。

資料室は図書室の横にあり、ポプラディアや辞典、星や花の本などがある、調べ物には持って来いの小さな部屋である。ちなみに私はこの部屋で起きた恋愛に関する話を一つ知っているのだが、それはまた今度の機会に書くことにしよう。

まあ、そんなこんなで私は資料室に入ったのだが、そこにTはいなかった。どうやらTはまだ来ていないらしい。

しかたない。

私は椅子に座って、Tが来るのをおとなしく待つことにした。

しばらくして、Tがひょっこりと姿を現した。

私の姿を見つけると、「聞いてきたよ!」と笑顔でこちらにやって

くる。

Tの好きな人に尽くそうとするその精神、今ならすごい勢いで褒めてあげたい。

この時の事もあまりよく覚えていない。
ただ、

「Nも、はじめのこと、好きだった」

そう言ったTの言葉を今でも私は覚えている。

こうして、Tを仲介にして私とNは付き合う事に

なる、わけがなかった。

女心と秋の空

「やっぱり、Tが好き」

こう言ったのは誰であろう。

誰でもない、小学四年生の私自身だ。

そう、私はこの時、NからTへ一瞬にして鞍替えしたのである。

女心と秋の空。とはよく言ったものだ。

まったくもってその通り。

私は秋空のごとく、Tへ気持ちを傾けた。

Tも突然の私の告白に頷いてくれた。

好きな女の子が別の男子より、自分の事を好きと言ってくれたのだ。

Tにとっては願ってもない結果になったことだろう。

こうして私とTは付き合う事になった。

もちろん、クラスの誰にも言っていない。二人だけの秘密のほずだった。

そう、？はず？だったのだ。

口は災いのもと（前書き）

いじめについて触れています。

読む人によっては不愉快になるかもしれませんが、ご注意ください

い m (m

口は災いのもと

秘密を打ち明ける人は、よく考えようね。

絶対に届くはずのない私の言葉。かつての私に言ってやりたい。

アイツ————（以下M）は当時の私のクラスにやってきた転入生だった。

どういう事があったかは分からないが、私は彼女と仲良くなってしまった。

そもそも、仲良くというより懐かれた……いやこれも違うな。

……そう！ ひつつかれたのだ！

理由は分からないが、私はMにひつつかれてしまった。

今では記憶がほとんどないが、彼女の事で覚えていることといえばクラスではあまり好かれていなかったことだ。

簡単に言うと、転入生というものは初めこそ人気者だが、ほとぼりが治まればイジメの対象になりやすいということだ。

実際、私の学年がそうだった。

今まで3人の転入生が来たが、そのうち2人は確実にイジメられていた。

ただし、このイジメは一時的なものであり、時期が過ぎれば徐々になくなっていった。

そんなこんなで、やはり彼女もイジメられる。

まあ・・・正しくいえば、嫌がらせだろうか。

男子は彼女の名前をからかったり、女子は性格を悪く言ったりとよくある光景である。

今の私もかつての私も、どちらかという事なかれ主義である。

いわばイジメはしないが、積極的に止めさせようもしない傍観者タイプということだ。

しかし・・・まあ・・・その・・・見ていると助けてやりたくなるのである。

Mも見るところを見れば、そこまで性格が黒いわけでもない。
いいところもあるのだ。（ただ、短所が目立つだけで）

そんなこんなで、私は————・・・・彼女と少しだけ、
う、ほんの少しだけ・・・仲良くなり、信用してしまった。

そしてMを少しだけ信用してしまった私は、彼女に言ってしまった
のだ。

自分はTと付き合っている。

そう、言ってしまったのだ・・・。。。

発言する時はよく考えて

それからの展開は早かった。

「ねえ、はじめって、Tと付き合ってるの?」

ある日、親しい友人にそう聞かれて私は驚いた。
彼女が言った言葉が信じられなかった。

私が、Tと、付き合って、いる?

なんで!?! どうして!?!

私の頭はパニックに陥った。
さまざまな疑問譜が浮かび上がったが、すぐにバレた原因が分かった。

おそらくM・・・——いや、あいつだ！

けれども、それに気付いた時にはもう遅かった。

噂はすでに広まっていた。

押すなよ！ 絶対に押すなよ！！

もちろん、あの時私はちゃんとMに伝えていた。

『この事は絶対誰にも言わないでね』

と。

しかし、押すなど言われれば押すのが人間。言うなど言われれば言いたくなるのが人間。

鶴の恩返しに出てきたあの老夫婦も、鶴との約束を破って障子の隙間から覗き見たではないか。

人の口は自分が考えているものよりも軽いものである。

口止めしても、そいつが誰かにポロリと漏らしてしまえばそれはあつという間に広がってしまう。

飛び出してしまった言葉は取り消せない。

・・・さて、Tとの関係がバレてしまった小4の私はどうなったのだろうか。

もちろん焦った。まさか、ばらされるとはこれっぽっちも考えていなかったからだ。

だが、

意外にも、

そう、意外にも、噂は全員に広まっていたわけではなかったらしい。

どうやら、私の学年の一部の女子の間だけで噂されていたようだった。

おかげで、私は男子からかわれることもなく、あの友人以外に私とTとの関係を聞かれることはなかった。

それだけは不幸中の幸いと言ってよかっただろう。

しかし、問題はまだある。

Tだ。

私と付き合っている張本人、T。

彼は、彼は一体この出来事をどう思っているのだろうか。

私は自分からこの噂について話すことはせず、ただTの出方を窺った。

私が友人からTとの関係を聞かれて、何日か経った。

その間Tは、

いつも通り私にちよっかいをかけてきただけだった。

本当に、それだけだった。

そこでやっと、私は気付いた。

もしかして……Tはバレたことに気づいてない！？

仮説

そう、Tは噂を知らなかったのだ。

じゃなければ、あんな笑顔で私にちよっかいをかけてくるはずはない。

では逆に考えてみよう。

何故、Tは噂に気付かなかったのか。

いや、そもそもどうして一部の女子にしか噂が広まらなかったのか。

これらを頭に入れて考えてみると、ある一つの仮説が思い浮かぶ。それを少し書いてみるが、今から書くことはあくまで予測であり、もちろん事実ではない。

まずMについておさらいしてみよう。

Mは転入生だ。私のクラスに入ってきて、まだ日も浅い。

さらに彼女はクラスの嫌われ者。よって友達が少ないのは火を見る

よりも明らかである。

友達が少ないという事は、喋る人が少ないということと同じだ。
喋る人が少なければ、もちろん私が言ってしまったことを話す相手も限られてくる。

そう考えれば、たとえ彼女が私とTとの仲をしゃべったとしても、
大概は嘘かと思われ耳も貸されず聞き流されるに違いない。

仮に、彼女と比較的仲が良かった人たちは大抵大人しめの子たちだった。

そんな子たちが、ぺらぺらと人のことを喋るだろうか？

いや、きっとほとんど喋らないはずだ。

恐らくこれらの要因が重なり、私とTとの関係は周囲に大きく広まらなかったのだろう。

断言はできないが、私はそうじゃないかと思っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1883q/>

かつての私の恋の話をしよう

2011年10月10日14時49分発行